

被災地訪問 支援 報告 (第一報)

平成 23 年 4 月 1 日

助産所 ままと赤ちゃんの家 助産師 武藤香子

(栃木県助産師会副会長 (助産所部会長))

平成 23 年 3 月 27 日 ~ 29 日被災地訪問と、支援が実現しました。

3 月 25 日、夜、東北自動車道の復旧がすみ、被災地での通信手段の確保、ガソリンの確保ができたため、仙台市青葉区の「森のおひさま助産院」

(院長 小野由紀子助産師 現宮城県助産所部会長 : 武藤とは、埼玉県立衛生短期大学看護科、助産学専攻科 での同級生)

から、現地の状況をお聞きし、現在必要な支援の方法を協議検討後、連絡調整をお手伝いいただきました。

翌、26 日、かねてから、ままと赤ちゃんの家への被災母子の受け入れのお手伝いを申し出てくれていた、那須友の会 (雑誌 婦人の友の愛読者の集まりで、日本と海外をあわせて、約 2 万 1 千人の会員がいます。那須友の会は、現在 48 人の会員数 : 武藤は、1991 年からの会員)

その総リーダーである井村さんにご相談し、支援物資 (那須友の会から 10 万円分) を購入しました。

また、個人で寄付をしてくださった、水、衛生用品、中古衣料、食料を車に積み込み、準備。

27 日、現地で要望の高かった、ケーキ 50 個とパン 50 個、野菜、果物を追加。

仙台に向け、10 時に出発しました。

東北自動車道は、道路のつなぎ目が破損しており、応急処置を施してありましたが、道路が凹凸でがたがたでした。ケーキが崩れるのを心配しながらの運転でした。

緊急車両や、自衛隊の車と一緒に走るのは、なぜか、緊張するものです。普段はあまり見かけないナンバーも多く、横断幕を掲げた車両もたくさん見かけます。



白石 IC で高速を降り、岩佐助産師の待つ、宮城県巨理郡山元町（わたりぐん やまもとまち）を目指す。約 30 km。

途中、道路の地割れが目立つ。斎場を中心に、お葬式の案内ばかりが、目に付く。

店は、コンビニでさえ休業中で、開店していても、ガムやほんの数冊の雑誌しかない状態。

自宅が全壊してしまった、という岩佐助産師は、実家に身を寄せていて、私を迎えてくれた。

「約 3400 人の町民が、9 箇所の避難所に避難している。

町の保健師と協力して、妊婦の状況を把握した。（詳しい名簿作成があり、妊産婦の現状を把握されている様子が伝わりました。）

避難所にいる妊婦は一人いる。全国の助産所で避難受け入れできるとの件を話してみたが、避難は考えられない、ということでした。」

岩佐助産師に、助産師会の活動の現状：全国 139 箇所の助産所で受け入れが可能であること。助産師会の「助産師マタニティサポート」無料相談受け入れ。被災された妊産婦さんへのメッセージ。以上の件をお伝えする。

「避難所には、自衛隊が常駐していて、物資も定期的に入ってくる。

自宅避難者への支援が必要です。長期的に、継続的に。

毎日、30 体ぐらいのご遺体を、埋葬しています。もともと畑だったところに、土葬しています。」というお話でした。

岩佐さんには、希望があった妊婦肌着、食料品をお渡ししました。

その後、途中、真庭避難所を通るのですが、そのとき目にした光景は、生涯忘れることができないものでした。自衛隊が取り囲む中、土葬するご遺体を 50 人ぐらいのご遺族が最後のお別れをしている光景でした。みな無言で・・・なんともいえない重苦しさです。

写真を撮って伝えたい思いもありましたが、とても、カメラを向けることができる雰囲気では、ありませんでした。

しばらく黙祷した後、被害が見渡せる斎場に寄りました。

3メートルぐらい高くなっている国道で、“つなみ” が止まった様子が、はっきり見て取れる場所です。斎場の隣に、仮設の遺体確認所が並んでいて、そこでご家族が、また輪になり立ち尽くしているような状態です。

「娘の友達が、今日葬式なんです。流された我が家は、あの青い屋根の・・・」と岩佐さんが、教えてくれました。

3 km ほど離れた松林の松の大木が流されて、目の前にごろごろ転がっています。



しばし、呆然とながめた後、遠慮がちに写真におさめ、山元町を後にし、仙台若林区に向かいました。仙台の南部沿岸部で、名取川、仙台空港周辺です。途中、岩沼市、名取市を通りました。

岩沼ICから東部道路に乗ります。東部道路は、防波堤としての役目を果たすためにもつくられたそうで、確かに東部道路を挟んで、右は、すべてのもの（家、工場、車、ありとあらゆるもの）が、流され流れ着いています。左側は、かなり被害がおさえられている様相です。



東部道路より山側を写す。（山側でさえ、この状態）

それから、今泉ICで高速を降り、若林区六郷中避難所に立ち寄り、避難を希望する母子が

いないことを、避難所の担当者から伺いました。昨日から、電気と、水道が復旧したために、自宅に帰る方もいるということでした。ここは、500人近い避難者がいたため、物資を分けるには、全く品数が不足しているので、なにも、おろせず立ち去ったのが心残りです。

若林区の隣、太白区のわたしの友人の家で、トイレを借り、携帯の充電、水の補給をして、近隣で、被災しているかたの状況を聞きました。

ガソリンがないため、買い物に行けず、困っている高齢者世帯を中心に、生鮮食品、衛生用品を配りました。

それから、私の次女を(中学一年生)わたしの実家がある山形行き的高速バスにのせるために仙台駅を訪れました。

仙台駅は、現在使用不可能で、防護シートで外壁が覆われたまま。階段はあちこち崩れ、通行止め、という状態です。いつ、再開可能なのか誰にもわからない様子です。





上は、橋の上で止まったままの新幹線MAXやまびこ号。

すっかり日も暮れ、宿泊先のおひさま助産院へ向かいました。途中、沿道に乗り捨てられた車が、列を成す様子は、いったい何事だろうという感じです。

皆、ガソリンを入れるために、車を乗り捨てて、その車で、順番をとっているのです。とにかくガソリンはなく、私も、那須塩原市で、満タンにしていったガソリンで、被災地を回り、また、那須塩原まで戻ることができるようにと、避難所までの距離を測りながらの移動でした。

小野助産師とも相談し、明日は、塩釜市、七ヶ浜町、多賀城市を回ることになりました。

28日、午前中は、おひさま助産院で、生後2日目の赤ちゃんを沐浴、バイタルチェック、黄疸のチェック、洗濯などを手伝う。この赤ちゃんを産んだのは、古川市の産科クリニックで三人目の赤ちゃんを出産の予定であった産婦さんです。今回の地震で、実家に帰ることができなくなり、自宅近くのおひさま助産院で出産されたかたでした。

11時30分、今日ボランティアをしてくれる高校生と大学生の姉妹ふたりを太白区で車に乗せ、塩釜市に向かいました。地元の開業助産師たちも、自宅が全壊、半壊、親族が亡くなっていたり、自分も、負傷してしまったりで、どうしてよいかわからない、という感じです。塩釜市の高津助産師からの依頼で、塩釜ガス体育館に到着。ユニクロからの(助産師会とジョイセフとユニクロがタイアップして実現)20箱あまりの衣類と下着を、仕分けして、保管場所に移動させるという仕事でした。



かなり広い体育館いっぱいに支援物資の段ボールが高く積み上げられている。助産師会の荷物はほんの一部だが、仕分けし、つぎの保管場所に移動するまで、二時間かかりました。

この避難所には、50人あまりが非難されているということで、中古のまんがや本、食料品を寄付しました。皆さん、毛布を敷いて、座っており、一部の人は、ロビーで雑談したり、電話をしたりしています。

お湯沸し当番がいるそうで、いつもガスコンロで、お湯を沸かしているそうです。自衛隊の人は、各地から届く災害物資をトラックから下ろしたり、お風呂のお湯を沸かしたり、夕食の準備をしていました。

自治体の職員も5人ほど事務作業をしていて、比較のおちついた様子です。



この避難所では、塩釜市にある、宝国寺というお寺の奥様と青年3人が、助産師会の物資をワゴン車で運んでくれていました。

塩釜市の状況をお聞きすると、ありとあらゆるものが不足しているということで、食料品、衛生用品、新品および中古衣料を差し上げました。15人あまりの人が避難しているということで、2週間風呂にはいっていないといっていましたので、衛生用品や、下着が、大変喜ばれました。

また、解散の時、塩釜ガス体育館でボランティアをしていた、助産師さんとその家族のかたに、パンとみかんの差し入れをしました。ある助産師さんは抱きついて喜んでくれました。あんパンが残ったので、隣に駐車していた、タクシーの運転手さんたちにも、差し上げてしまいました。皆さん、かぶりついていたのと、何度も何度もお礼を言われていたのが、印象的でした。甘いものや新鮮なものが本当に喜ばれました。

その後、私にとっては、思い出深い、七ヶ浜町の、菖蒲田(しょうぶだ)海岸周辺に入りました。

子供のころから、海水浴で楽しんだ美しい海岸です。

山の上からが全体を見渡せそうだったので、七ヶ浜生涯学習センター（ボランティアセンターあり）の避難所に行きました。

そこは、広い公園があるのですが、少し山を下っていったところで目にした光景に、私たちは、一瞬立ち尽くしてしまいます。

山元町で見た光景がさらに凝縮されていたのです。

なにもかもが、原型をとどめないくらいぐちゃぐちゃになって、湾いっぱい広がっています。たぶん全速力で、1～2 kmを走ってこの山に駆け上がらなければ、きっと間に合わなかったであろうことが、容易に想像できます。子供や、高齢者には、きっと無理。

若い人でも海岸近くの人、大勢が犠牲になったであろうことを物語る光景です。



写真は最高までフォーカスしてします。



この山で黙祷した後、あちこち通行止めになっているところを縫うように、多賀城市を目指しました。このあたりからは、流されてきたごみの山、ただのごみと化した車がとりあえず、脇にどかされています。

水で家の汚れを落としている住民がぼつぼつとですがいました。

惨状にただただ息を呑みながら、大渋滞の中、多賀城市を行了きました。

沿道で水につかっていない家はなく、1 m 5 0 c m ぐらいに泥水のあとが全部についているのです。

そして、なんともいえない臭いで、気分が悪くなるのを我慢しつつ、運転し続けました。

海全体が腐ってしまったような、そんな臭いです。



途中悲しい光景に遭遇しました。汚れた服装の初老？の男性が、「轆けー！轆いてくれー！」と叫びながら、渋滞する車の前にねそっべてしまうのです。

反対車線での出来事でしたが、どのドライバーもクラクションを鳴らすわけでもなく、みな辛抱強く、男性がよろよろと退くのを待っているのです。そうこうする内に男性はあきらめたのか、ふらふらとどこかに行ってしまいました。

絶望しているのでしょうか。家族でもなくしたのでしょうか。

いずれにしても、生き残った人も本当に打ちひしがれて、生きていけない人もででくるのではないかと、危惧される出来事でした。



多賀城市からの渋滞をやっと抜けるころには、すっかり日が暮れて、どっと疲れてしまったわたしたちは、なんとか、ファミレスにたどり着き、ボランティアの大学生と高校生を帰宅させ、わたしも、おひさま助産院にたどり着きました。

ガソリンを求める車の列はまったく解消する様子はありませんでした。

明日は、那須塩原に帰るだけで精一杯と判断しました。

29日、9時30分、おひさま助産院を出発、仙台駅周辺で山形からの高速バスに乗った次女をのせ、一路、那須塩原市を目指しました。仙台市内は、特に駅周辺は大渋滞で、やはり通行止めが多く、住民は本当に大変であろうと思われます。

帰りの東北道のぼりは、私のような、支援を終え、埃と泥で汚れきった車や、これから親族を自宅に迎えるのか、荷物と人をたくさん乗せた車で、やや混んでいました。

一方、くだりは、きれいな車で、横断幕も勇ましく、元気いっぱいに見えるのが、不思議です。

今後は、どのような支援がよいのか、多様の、団体と連絡調整を取りながら、長期的、継続的な支援を続けていかなければならないと強く思います。

被災しても、傷ついても、力をあわせて忍耐強く生きている、被災地の方々に実際お会いして、本当に感銘を受けました。行ってよかった！！

今回、被災地のために、多くの力を貸して下さったすべての皆様に心からの感謝をこめて、第一報をご報告いたします。

ありがとうございました。